
批評と紹介

ステファン・カモラ著

『モンゴル史の創造

——ラシード・アッディーンと『集史』

大塚 修

ついに世界が動いた。これが最初に抱いた印象だった。本書は、イルハーン朝（1256～1357）の宰相を務め、歴史家としても知られるラシード・アッディーン（1318没）の生涯を、著作活動を軸に再構成した上で、その背景にあるモンゴル帝国の中東支配の性格を論じた専門書である。もちろん歴史上重要なこの宰相に関する研究の蓄積は多い。しかし、著者が強調しているように（vii頁）、手稿本を含む原典史料の読解に基づいた研究成果は、既知の情報を繰り返すだけの先行研究とは一線を画すもので、一読に値する研究だと評価できるだろう。注目すべきは、ラシードの代表作『集史』の手稿本研究に真正面から取り組んだ点で、第1巻「モンゴル史」手稿本群の書写の過程を再現した系統図までもが示されている（135頁）。

ところで、この『集史』第1巻「モンゴル史」手稿本の研究は、日本の学界で好まれ、日本語の世界で「独自の」発展を遂げてきた特異な研究分野であった。そこに外から一石が投げられた形となったわけだが、非漢字文化圏の学界では、日本語の研究の参照は必須とはされず（87頁註47）、ここでは、その成果の多くは参照されていない⁽¹⁾。その上、提示される学説の中には、結論が異なっているものも多い。今後、本書が『集史』研究の世界標準となる可能性の高さに鑑みれば、関係する研究者はその是非について、見解を表明する必要があるだろう。評者の研究関心と重なる部分については英語論文で疑問点を指摘する予定だが、学界に及ぼす影響の大きさに鑑み、本書出版の意義と疑問点の一部を日本語でも紹介したい。

本書の著者ステファン・カモラ（Stefan Kamola）は、若くして『イスラーム百科事典』第3版の「イルハーン朝」の項目（“Īlkhānids,” *Encyclopaedia of Islam*, Three, 2019-4）の執筆を任された、アメリカを代表するモンゴル帝国史研究者の一人である。本書のもととなったのは、著者の博士論文（*Rashid al-Dīn and the Making of History in Mongol Iran*, Ph.D. thesis, University of Washington, 2013）で、重複する内容も多い。ただし、削られている議論や

註が多く⁽²⁾、その簡略版を増補した形になっているようである（つまり、著者が展開する議論を完全に理解するためには、博士論文も参照する必要がある）。本書の構成は次の通り。

第1章「イスラーム世界におけるモンゴル人 1218～1280年」（1-27頁）

第2章「ありそうもない生涯のありそうな道筋 1248～1302年」（28-58頁）

第3章「モンゴル王朝史 1302～1304年」（59-90頁）

第4章「信仰と権力に関する新しい企画 1304～1312年」（91-120頁）

第5章「モンゴル史の再創造 1307～1313年」（121-153頁）

第6章「ラシード・アッディーン像の創造 1312～1335年」（154-177頁）

終章「シャー・ルフ宮廷におけるラシード・アッディーン」（178-182頁）

補遺A『『集史』とその挿絵』（183-208頁）

補遺B『『集史』手稿本目録』（209-271頁）

この構成から明らかのように、本書は、ラシード・アッディーン台頭前後の歴史を年代順にたどっていく構えをとる。第1章は、「モンゴル帝国の中の中東」、「バトゥとグユクの反目」、「トルイ家のクーデタ」、「イルハーン朝の正統性の記念碑」という四つの節から構成され、ラシード台頭の背景となった、モンゴル帝国の中東進出の過程が概観される。第2代イルハーン朝君主アバカ（在位1265～82）の治世に至る、モンゴル帝国の拡大、内部の権益争い、その過程でトルイ家が中東における支配権を確立していく様子が説明される。その特徴として強調されるのがモンゴル系支配者とペルシア系官僚との協力関係で、イルハーン朝建国に際して、後者は、モンゴル侵入以前から続くイランの文化的象徴を利用した、とする。

続く第2章は、「ハマダーンからマラーガへ」、「イルハーン朝宮廷における派閥主義と改宗」、「ガザンに仕えて」、「影の宰相」、「シリアにおけるガザンの戦い」の五つの節からなる。ここでは、第1章で概観された歴史的背景をふまえた上で、イラン南西部ハマダーンのユダヤ教徒の家系に生まれた、ラシード・アッディーンの前半生が再構成される。彼がイルハーン朝で出世を成し遂げた一因は、後に第8代君主となるオルジェイト（在位1304～16）の誕生に立ち会うなど、王朝との強い紐帯にあったという点が強調される。ここで対象とされるのは、第7代君主ガザン（在位1295～1304）のシリア遠征に至るまでの時期である。

イスラーム教への改宗で知られるガザンは、上述のモンゴルとイランと

いう要素に加え、イスラーム教徒としてのアイデンティティを重要視した君主だと評価される。「古い問題に対する新たな取り組み」,「初期イルハン朝歴史叙述」,「新しい歴史的感性」,「祝福されたガザンの歴史」の四つの節からなる第3章は、そのガザンによる歴史書編纂の庇護が主題とされる。ここでは、モンゴル帝国の歴史がペルシア語歴史叙述に組み込まれていく過程が説明される。セルジューク朝（1038～1194）では、「歴史家どうしのために」（62頁）歴史書が編纂されていたとし、その流れを汲んだ形で、ガザン以前には、ジュワイニー（1283没）著『世界征服者の歴史』,バイダーウィー（1316/7没）著『歴史の秩序』,クトゥブ・シーラーズイー（1311没）著『モンゴル史』などの歴史書が編纂されたとする。一方、君主の命令による歴史書の編纂の始まりはガザンであるとし、ワッサーフ（1328以降没）とカーシャーニー（1323/4以降没）の歴史書編纂, ラシードによる「モンゴル史」編纂について紹介される。

「ガザン没後の歴史」,「カーシャーニーの主張」,「建築と信仰」,「遺産の集積」の四つの節からなる第4章では、ガザン没後にオルジェイトの命令で始められた、ラシードによる『集史』編纂の試みが主題とされる。ここでは、オルジェイトが重視したのは、ガザンとは異なる、世界の支配者としての側面であったという点が強調される。当時国際都市となっていた王都タブリーズでの学術活動の成果として、カーシャーニーとラシード・アッディーンの世界史編纂の事例が取り上げられている。この両者の関係については、博士論文の段階では参照されていなかったカーシャーニー著『歴史精髄』のテヘラン手稿本（Tehran University Library, Ms. 9067）の分析が追加され、大幅な書き換えがなされている点は特筆に値する⁽³⁾。さらに、オルジェイトのシーア派改宗と同時期に行われた、神学著作を中心とするラシードの著作活動、そして、それに貢献したラシード区の役割についての説明がなされ、このような著作活動や建築活動を通じて、ラシード像が確立していったという点が強調される。

第5章は、「系図」,「過去の図像化」,「文章の修正」,「再生への挑戦」,「後世の諸異本」の五つの節からなるが、ここが本書出版に際して、著者が最も大きく書き改めた部分で、オリジナリティに富んだ部分だと言えよう。ここでは、『集史』第1巻「モンゴル史」の諸手稿本の異同の分析に基づき、一度完成した本文が、1307年から1313年にかけて「少なくとも5度」ラシード本人の手で（135頁）、その後、第三者の手で書き直されていく過程が「美しく」説明される。また、東方からの影響が目されがちな編纂過程について、その中に挿入される、ラシードが「発明」した系図の書き方は、ボワティエのペトルス（1205没）著『キリスト系図史要覧』から採

用された(129頁)、と西方からの影響についても言及する。

第6章では、ラシード・アッディーンの生涯に話が戻される。「イルハーン朝宮廷年代記におけるラシード・アッディーンの二つの顔」,「ラシード・アッディーンの失脚」,「ラシード・アッディーンに関する初期の伝記史料」,「イルハーン朝末期の歴史叙述」,「本一冊分の鑑」の五つの節から構成されるこの章では、現在の学界で共有されている、良き宰相としてのラシード像がいかんにして形成されるに至ったのか、についての説明がなされる。これに関しては、ラシードに仕えた歴史家ムスタウフィー(1344頃没)の役割が強調される。彼の作品の中で、サーサーン朝(224~651)の伝説上の名宰相ブズルグミフル、そして、セルジューク朝の名宰相ニザーム・アルムルク(1092没)と関係付けられたがために、「模範的なバルシア系宰相」という人物像が確立したとの主張がなされる。最後に、ラシードの死のおよそ1世紀後、その歴史叙述に大きな影響を受けた、ティムール朝(1370~1507)の宮廷史家ハーフィズ・アブルー(1430没)による歴史編纂事業が概観され、結論に代えられている。

このように本書は、ラシード・アッディーンという一人の偉人の人物史に留まらず、モンゴル帝国の中東支配の性格を考える上で重要な様々な論点を提供するものである。未刊行の研究をも含む最新の研究を網羅し、手稿本をも含む原典史料の読解に基づいて論じられた本書の価値は高い。例えば、これまでの歴史研究では効果的に参照されてこなかった、ムスタウフィーの手になる韻文普遍史書『勝利の書』の分析にも積極的に取り組んでいる⁽⁴⁾。そして何より注目すべきは、本書において最も多くの紙幅が割かれている補遺Bと、それに基づく議論が展開されている第5章であろう。2013年の博士論文では、手稿本はわずか4点しか参照されておらず、刊本の校訂註で示された手稿本間の異同の情報に大きく依拠した議論は不完全なものであった。それから6年も経たないうちに、参照し得る限りの手稿本を収集し、第1巻「モンゴル史」に留まらず第2巻「世界史」の手稿本間の異同を検討し、それらの関係を明らかにしたというのだから、驚きしかない。評者は、これまでの『集史』手稿本研究の弱い所は、一部の古手稿本の分析しかなされていない点だと考えていたが、本書はその問題に対する答えとなっている。本書の完成に至るまでに著者が払ってきた労力に対して心からの敬意を表したい。本書は間違いなく、ラシード・アッディーン研究、イルハーン朝史研究、そして、『集史』手稿本研究の重要な研究の一つとして長く参照されることになるだろう。

評者は、かつて『集史』手稿本目録を作成したが(『集史』第2巻「世界史」校訂の諸問題——モハンマド・ロウシャンの校訂本に対する批判的

検討を中心に』『アジア・アフリカ言語文化研究』91, 2016年, 58–61頁), 当時知られていなかった, 14世紀後半から15世紀前半にかけて書写されたというトロント手稿本(Aga Khan Museum Ms. AKM517)を著者は見出し, 系統図の中に位置付けている(223–224頁)。また, パリ国立図書館に所蔵される『改訂版集史』の2手稿本(Paris, National Library, Ms. Suppl. persan 160 & Suppl. persan 2004)が, 一揃いで作られたものであることを論証するなど(249–250頁), 評者にとって気付かされた点も幾つかあった。そして, 何より興味深い指摘は, 第1巻「モンゴル史」の最初期の形態を保存する手稿本を, これまで注目されてこなかったミュンヘン手稿本(State Library, Ms. Cod. Pers. 207)だと断じた点であろう。これは網羅的に手稿本を検討した著者の強みで, 日本の『集史』研究者たちがどのような反応を示していくのか, 今後の議論の行方が楽しみである。

このように本書の評価すべき点は多い。しかし, 「だからこそ」なのかもしれないが, 物足りない点も少なからずあった。著者は『集史』に加え, ラシードの神学著作集の重要性も認知しているにもかかわらず, その分析については, 40年前の研究(J. van Ess, *Der Wesir und seine Gelehrten*, Wiesbaden, 1981)にほぼ全面的に依拠するに留まる。「神学著作集の多くは出版と体系的な研究を待っている」(117頁註42)と断っているが, ペルシア語版神学著作集の全作品の校訂出版は2015年までに完了しており⁶⁾, じつは現在, それらを「容易に」利用できる状況にある。体系的な研究というのは本書で行われるべきであったのだ。著者が自ら神学著作集の分析に取り組んでいれば, 新たな発見があったであろうことは間違いなく, 惜しまれる。

文献研究という側面が強い本書だが, このように, 『集史』以外の文献に対する著者の関心を強く感じとることはできない。例えば, シャバーンカーライー(1335/6以降没)著『系譜集成』は「9世紀のサッファール朝以降のイランの王朝史」と紹介される(162頁)。しかし, これは著者が参照した部分校訂の内容であり(Shabānkāra'ī, *Majma' al-Ansāb*, ed. M. H. Muḥaddith, Tehran, 1984/5), 著作全体の内容ではない。後に, 天地創造に始まる前半部の校訂も出版されており(Shābānkāra'ī, *Majma' al-Ansāb (Nīma-yi Awwal)*, ed. M. H. Muḥaddith, Tehran, 2002/3), 後者を参照していれば(そうでなくとも, 前者の史料解題を読んでいけば), このような間違いを犯すことはなかっただろう。また, イルハーン朝時代の歴史叙述の特徴の一つとして, 上述の『勝利の書』などの韻文史書の編纂が指摘されて久しいが, イルハーン朝時代初期に編纂された韻文普遍史書『吉兆の書』(1276～82年)は取り上げられていない。こちらも同様に校訂出版されており(Zajjā'i, *Humāyūn Nāma*,

ed. ‘A. Pīr-niyā, 2 vols., Tehran, 2004/5; Zajjājī, *Humāyūn Nāma (Nīma-yi Nukhust)*, ed. ‘A. Pīr-niyā, Tehran, 2012), 容易に利用できる状態にある。歴史叙述も本書の主題の一つであるため、もう少し広い目配りがほしかったところである。

手稿本調査も一見徹底しているように見えるが、不完全である。著者は、イランに所蔵される手稿本については、手稿本総合目録 (M. Dirāyatī, *Fihristwāra-yi Dastniwīsh-t-hā-yi Īrān*, 12 vols., Tehran, 2010)⁽⁶⁾に依拠しつつ、多くについてはオンラインで確認できる情報から評価を下しているようである。手稿本研究を行う上で、総合目録を最初に参照するのは、もちろん常套手段だが、そこで落ちている情報、また、不正確な情報も多い点には自覚的でなければならない。そのせいか、15世紀に書写されたテヘラン手稿本 (Tehran University Library, Ms. 8791) など、幾つもの手稿本の存在を把握できていない。手稿本研究を行う際には、実際に各図書館の目録を参照した上で、可能ならば現物にあたる、というのが最も確かな方法だろう。

現物にあたる必要性という点から気になったのは、手稿本の系統図を作成する作業の過程で、実際にテキストを見ていないと思われる手稿本までもが分類されてしまっている点だ。例えば、『集史』第1巻「モンゴル史」のチャガタイ語訳手稿本 (Tashkent, al-Biruni Center for Oriental Manuscripts, Ms. 2) がアラビア語訳に分類されている (226頁)。また、第2巻「世界史」の内容を含むイスタンブール手稿本 (Topkapı Palace Library, Ms. Ahmet III 2935) を、「沢山の詩を書き足し、そのテキストをフィルダウシー著『王書』と連動させたもの」(255頁)と評価するが、その内容は実際には他の手稿本と同じである。文献研究は、地味な作業ではあるが、その成果は「正しい前提」として他の研究者に参照されてしまうため、よほどの根拠がない限り、見ていない手稿本を分類することは慎むべきである。テキストを参照している手稿本の評価についても疑問がある。ミール・ハーンド (1498没) 著『清浄園』からの引用記事が収録される、明らかに『集史』とは別著作の手稿本 (Manchester, John Rylands Library, Ms. 406) についても、その引用記事の存在に気付いていながら、これを『集史』の縮約版だとする (257-258頁)。これが許されれば、後世の多くの著作が『集史』の異本ということになってしまう。

手稿本系統の分析で新しい主張の一つが、パリ手稿本 (National Library, Ms. Suppl. persan 1113) 系統の手稿本群に見られる、ガザンの前半生に関する異文の著者を、上述のカーシャーニーとしている点である。博士論文には存在しないこの主張は、最近ジョナサン・ブラック (Jonathan Brack) により唱えられたもので (*Mediating Sacred Kingship: Conversion and Sovereignty*

in *Mongol Iran*, Ph.D. thesis, University of Michigan, 2016, pp. 322–344), それ
が採用されている (230頁)。しかし、ブラック説の根拠は、この異文が他
の部分とは異なり修辭的な文章である点などで、カーシャーニーの文章と
断定できる決定的な証拠ではない。本書のような研究では、こういった根
拠の不確かな主張に無批判に依拠するのではなく、丁寧に検証する必要が
あったのではないか。

21世紀に入り、続々とペルシア語の未刊行史料が校訂出版され、世界の
図書館に眠るペルシア語手稿本へのアクセスも容易になってきている。そ
の恵まれた環境の下で刊行された本書には目を見張るべき見解が盛り込ま
れている。その一方で、その環境を存分に活かし切れていないのもまた事
実である。ウリの一つであるはずの文献研究の成果については、疑問を抱
かざるを得ない点も多い。しかしながら、これまでに日本の学界の外で『集
史』手稿本研究に真正面から取り組んだ研究者はおらず、本書の刊行が世
界の学界に与える影響は甚大なものとなるだろう。それに鑑みれば、今後
のこの分野の研究の発展のためにも、本書における議論の是非について、
見解を積極的に発表していく必要がある。特に、豊富な研究蓄積のある『集
史』『モンゴル史』研究者からの応答が待たれる。日本語による研究の意義
についても改めて色々と考えさせられた一冊であった。

註

- (1) 国内外の『集史』手稿本研究の現状については、宇野伸浩「『集史』第
1巻「モンゴル史」の校訂テキストをめぐる諸問題」吉田順一監修『モ
ンゴル史研究——現状と展望』明石書店、2011年、44–46頁参照。そこで
紹介されている7人の研究者の業績のうち、本書で参照されているのは、
欧米言語で研究成果を刊行している志茂智子と白岩一彦の一部の業績の
みである。
- (2) 例えば、1248年だと考えられてきたラシードの生年を1247～51年に訂
正する議論 (55頁註7) の詳細については、博士論文 (107–108頁) を参
照するように、という指示がある。ちなみに、削除された議論の典拠が
示されていないことも多く、注意が必要である。
- (3) カーシャーニーの普遍史書が『集史』第2巻「世界史」の種本となっ
た点については、評者がすでに明らかにしていたが (大塚修「史上初の
世界史家カーシャーニー——『集史』編纂に関する新見解」『西南アジア
研究』80, 2014年、25–48頁; O. Otsuka, “Qāshānī, the First World Historian:
Research on his Uninvestigated Persian General History, *Zubdat al-Tawārīkh*,”
Studia Iranica, 47-1, 2018, pp. 119–149), それと同じ結論が導き出されてい

る。ただし、テヘラン大学「中央図書館」所蔵のこの手稿本を「文学部」所蔵としたり、存在する「ホラズムシャー朝史」の章が存在しないと断じるなど（193頁）、単純な誤りも散見される。

- (4) ただし、「私はその散文を整えた *man ān nathr rā nazm kardam chunīn*」と訳し、それを根拠に、ムスタウフィーは『集史』の内容を整理したと断じている個所（165-166頁）は、「私はその散文を韻文にした」と訳すべきだと考えられ、この部分は論じ方を変える必要があるだろう。
- (5) 本書で参照されていない、校訂出版されている神学著作集は、Rashīd al-Dīn, *Miftāḥ al-Tafāsīr*, ed. H. Rajab-zāda, Tehran, 2013; Rashīd al-Dīn, *Tawḍīḥāt-i Rashīdī*, ed. H. Rajab-zāda, 2 vols., Tehran, 2015; Rashīd al-Dīn, *Mabāḥith-i Sulṭānīya*, ed. H. Rajab-zāda, Tehran, 2015; Rashīd al-Dīn, *Latāyif al-Haqāyiq*, ed. H. Rajab-zāda, 2 vols., Tehran, 2015。
- (6) その後、さらに詳細な M. Dirāyatī, *Fihristgān-i Nuskha-hā-yi Khaṭṭ-i Īrān*, 45 vols., Tehran, 2012 も出版されており、こちらも参照すべきだろう。

Stefan Kamola, *Making Mongol History: Rashīd al-Dīn and the Jami' al-Tawarikh*, Edinburgh: Edinburgh University Press, 2019, x+310pp.

（東京大学大学院総合文化研究科准教授）